

母親からみた子どもの発達のすがた（Ⅰ）

－平均値の変化にもとづく分析－

○後 藤 宗 理 小 沢 志 江 子 高 橋 一 代 宮 谷 玲 子 前 田 キ ミ ヨ 杉 浦 き く 子
 （名古屋市立大学） （名古屋自由学院 短大） （豊橋創造大学短期大学部）（明照保育園）
 古 田 彰 子 早 川 幸 子 安 藤 節 子 成 田 君 子 河 村 芳 子
 （岡崎市役所）（岡崎市北野保育園） （蒲郡市役所） （保育研究会）（愛知学泉女子短期大学）

〔 目 的 〕 われわれはこれまで、保育園に子どもを預けている母親の育児意識を調査したり、母親に対して育児に関する情報を提供する試みを行ってきた。それとともに、子どもの発達状態を定期的に報告してもらった。その資料の収集は、2歳から5歳までの4年間にわたるのべ5回の調査となった。このうち、2歳から3歳おわりまでの3回の結果についてはすでに本学会で報告したが（小沢ほか、1995）、今回の報告では、2歳から5歳おわりまでの5回の結果をまとめて検討することを目的としている。第1報では子どもの発達のすがたを調べる個々の項目平均値の推移についての分析結果を報告する。

〔 研究方法 〕 1992年4月に、愛知県下42保育所の2歳児クラスの子どもの母親に質問紙調査（持ち帰り法）を依頼した。その後、その母親に5歳児クラスのおわりまで継続して調査した。調査時期と被調査者数は次のようである。

- 1 回目 2歳児クラスのはじめ（1992年4月：325名）
- 2 回目 2歳児クラスのおわり（1993年3月：276名）
- 3 回目 3歳児クラスのおわり（1994年3月：256名）
- 4 回目 4歳児クラスのおわり（1995年3月：238名）
- 5 回目 5歳児クラスのおわり（1996年3月：208名）

今回の分析に用いられたのは、5回の調査にすべて回答した208名分の資料である。

質問紙は、子どもの発達のすがたを「生活習慣」（項目1-5）「性格」（項目6-10）「社会性」（項目11-15）「ことば」（項目16-20）「遊び」（項目21-25）の5つの側面から記述した25項目と、母親の育児意識をたずねる32項目からなっていた。それぞれの項目について5点評定法で評定を求めた。今回の報告では、このうち、子どもの発達のすがたについての調査に関した調査だけを取り上げることにする。

子どもの発達のすがたをたずねた25項目のうち、8項目は2回目あるいは3回目から項目内容を変更したので、今回の分析では、項目内容を変更していない17項目に限定して分析することにした。項目内容については、表1に示した通りである。

〔 結 果 〕 1. 項目別平均値の推移について

17項目の項目別平均値と分散分析の結果について表

わしたものが、表1である。表1には、平均値の結果が被調査者全体についてと男女別のそれとが示されている。はじめに、各項目の平均値のレベルを見てみると、1、3、8、10、11、12、16、20、21、22、23の11項目では、評定値がおおよそ1点台にあり、評定に用いた行動についてその傾向が認められることを示している。一方、14、15などでは評定値が3点から4点にあり、問題とした行動があまりあてはまらないことを示している。

つぎに、平均値の推移を分散分析の結果に基づいてみる。表から明らかなように、17項目のうち、8「泣いている子をみると心配そうにみたり、なでたりする」、23「身近なものの色や形に興味を持っている」の2項目を除く15項目で、時点間の主効果が有意であった。15項目のうち、1、2、11、12、13、19の6項目では年齢とともに平均値が小さくなっており、次第にその行動があてはまるようになってくる。

一方、10、15、16、22の4項目では年齢が上がるにつれて平均値が高くなり、その傾向が弱くなるといえる。また3、9、14、20、21の5項目では2歳から3歳にかけていったん平均値が小さくなるが、その後上昇傾向に転じている。この結果については明確なことは言えないが、項目内容の意味するところが年齢によって変わっているのかもしれない。

2. 性別に見た傾向の違い 表1によれば、分散分析の性別の主効果が有意である項目は、5項目（8、11、14、19、23）あった。このうち、8「泣いている子をみると心配そうにみたり、なでたりする」19「言葉がはっきりしている」23「身近なものの色や形に興味を持っている」の3項目では男児よりも女児の値の方が小さく女児にその傾向がよくみられる。一方、11「同じような年のこと一緒にいることを喜ぶ」14「気に入らないとかみついたりひっかいたり、叩いたりする」の2項目では男児の値の方が低くその傾向が強い。

なお、19「言葉がはっきりしている」は、時点と性別の交互作用が有意であった。表から明らかなように男児の場合には年齢とともに平均値が減少し、言葉が年齢とともにはっきりしてくるのに対して、女児の場合には年齢の低い段階から言葉がはっきりしていて5

表1 母親の評定による子どもの発達の変の平均値の変化 (回答者数: 全体 208, 男子 120, 女子 88)
(評定平均値: 値が低いほどあてはまることを意味している)

調査回数 項目内容			1	2	3	4	5	分散分析の結果		
								時点の主効果	性別の主効果	時点×性別
1 こぼしたりするが、自分で食べようとする	全体		1.38	1.42	1.27	1.15	1.15	***		
2 食べ終わるまでほとんど座っていることができる	全体		2.94	2.68	2.25	2.05	1.83	***		
3 目についたものをいじったり、もてあそんだりする	全体		1.89	1.46	1.53	1.76	1.78	***		
8 泣いている子を見ると心配そうにみたり、なでたりする	全体 男子 女子		1.79 1.88 1.68	1.71 1.69 1.73	1.77 1.88 1.63	1.82 1.93 1.67	1.74 1.85 1.59		*	
9 ちょっとのことですぐ泣く	全体		2.80	2.47	2.49	2.49	2.88	***		
10 自分の意志を通そうとする	全体		1.39	1.45	1.53	1.74	1.88	***		
11 同じような年の子と一緒にいることを喜ぶ	全体 男子 女子		1.48 1.40 1.59	1.34 1.32 1.36	1.25 1.21 1.30	1.30 1.22 1.41	1.26 1.19 1.36	***	*	
12 友達とあそびたがる	全体		1.43	1.26	1.24	1.29	1.22	***		
13 「だめ」といわれるとやめる	全体		2.94	2.72	2.66	2.59	2.35	***		
14 気に入らないとかみついたり、ひっかいしたり、叩いたりする	全体 男子 女子		3.27 3.19 3.39	3.00 2.93 3.08	3.29 3.14 3.50	3.73 3.49 4.07	4.03 3.99 4.09	***	*	
15 友達が欲しがると自分の持っているものをあげるがすぐ取りかえす	全体		2.96	2.94	3.18	3.41	3.49	***		
16 困った時には、親に助けを求める	全体		1.47	1.52	1.71	1.72	1.85	***		
19 言葉がはっきりしている	全体 男子 女子		2.00 2.22 1.72	1.63 1.72 1.52	1.59 1.75 1.38	1.52 1.63 1.38	1.47 1.48 1.44	***	*	*
20 ひとりしゃべりをしながら遊ぶ	全体		1.66	1.48	1.70	2.00	2.30	***		
21 近くに大人がいる時はひとり遊びができる	全体		1.45	1.41	1.59	1.70	1.96	***		
22 自分の気持ちを言葉でつたえようとする	全体		1.16	1.26	1.28	1.34	1.33	**		
23 身近なものの色や形に興味を持っている	全体 男子 女子		1.46 1.48 1.43	1.44 1.50 1.35	1.41 1.54 1.23	1.50 1.58 1.39	1.43 1.52 1.32		*	

(注) 表には、被調査者全体の平均値、性別の主効果および時点と性別の交互作用のみられた項目の男女別平均値を示した。

歳段階で男児が追いついてくるといえる。

3. 項目別にみた時点間相関 17項目について、5回の調査時点間の相関を調べたところ、つぎにあげる項目の時点間相関を除く、それぞれの相関はいずれも有意な値を得ていた(項目1<1、2と4、5>;項目3<1と4、5>;項目11<1、2、3と5>;項目15<2と4>;項目20<1と5>;項目21<2と3、4、5>;項目22<1と5>)。全体として時点が離れるほど相関関係が弱くなるといえる。

4. 因子分析の結果 表1の17項目について、3回目のデータを用いて因子分析(オブリミン解)を行った。そして4因子を抽出した。因子を構成する項目の

内容からそれぞれ表現力(項目番号19、20、22、23)、自主性(1、3、15、16、21)、協調性(8、10、11、12)、自己統制力(2、9、13、14)と命名された。

[考察] 母親から見た子どもの発達のはたは、全体としては年齢とともに予想された発達の方向へ進んでいるが、年齢とともにすべての項目で同じように進むわけではなく、また男児と女児では発達の進み具合に違いのあることが明らかにされた。今後は、因子分析の結果に基づいて因子間の相関関係とそれぞれの因子での発達の変化が、母親の意識とどのように関わるのかを、さらには発達の状態と母親の意識との関係をさらに詳しくみていくことが必要であろう。